

第5章 歴史ストーリーと関連文化財群

1 関連文化財群の設定の考え方

第3章及び第4章にて整理した本市の歴史文化の概要を踏まえ、関連の深い歴史文化資源を一体的に捉えた「関連文化財群」として設定します。

(1) 関連文化財群の定義と目的

関連文化財群とは、「地域の多種多様な文化財を、その指定や未指定に関わらず、歴史文化の特徴に基づくテーマやストーリーに沿って一定のまとまりとして捉えたもの」です。複数の文化財を関連性に基づいて一体的に整理し、保存活用することにより、その魅力を高めるとともに、本市の歴史文化や文化財の価値をわかりやすく市民に伝えることを目的としています。

関連文化財群の設定において注意した点は、以下のとおりです。

- 現在の本市の魅力に繋がるものであること
- 対象となる文化財が歴史的関連性を持ち、その内容や価値が明らかなものであること
- 対象となる文化財に共通する保存・活用のテーマが見いだせること

(2) ストーリーの作成

文化財を通じて、本市の歴史的な魅力や特色をわかりやすく伝えるため、関連文化財群を総括する6つの歴史ストーリー(物語)をまとめました。

◆◆◆ 関連文化財群をあらわす6つの歴史ストーリー ◆◆◆

1 那須の大地と連山～大扇状地と海の記憶～

- 日本有数の大扇状地
- 蛇尾川～10km に及び水無川～
- 扇中央部と扇端部の狭間の湧水
- 豊富な化石
～海の記憶とかつてあった塩原湖
- 大黒岩化石層群～塩原動物群～
- 連山を刻む溪谷と清流
- 那須岳と高原山

2 歴史が示す那須塩原～縄文から戦^{いくさ}まで～

- 槻沢遺跡と井口遺跡
- 源頼朝による盛大な那須野巻狩
- 郡界の攻防～中世の城館～
- 各藩・幕府領が入り乱れた江戸期の支配者
- 那須塩原地区と戊辰戦争
- 特攻隊基地にもなった陸軍那須野飛行場

3 関東と東北を結ぶ道～街道と鉄道～

- 奥州街道と鍋掛・越堀
- 物資の輸送に利用された原街道(原方道)
- 会津中街道～険しい山越えの道～
- 塩原道と関谷道
- 新陸羽街道と塩原新道～道路網の整備～
- 近代那須地区の歴史を大きく変えた
東北本線
- 那須人車軌道と塩原軌道(塩原電車)
- 西那須野と大田原・八溝山地をつないだ
東野鉄道

4 水の恵みを求めて～疏水と大農場～

- 旧村をうるおす用水網と
幕府の新田開発事業
- 日本三大疏水の一つ
～大農場をうるおす那須疏水～
- 大農場による開拓
- 開拓の労苦を語る「石塚」
- 目をみはる大農場区域
- 華族農場の果たした役割
- 華族の別邸

5 産業と民俗～農村のくらしと文化～

- 那須野が原の農業
～畑作から米どころへ～
- 那須野が原の畜産業
～馬産・養蚕・綿羊～
- 本州一の酪農地域
～明治の大農場から戦後開拓へ～
- 集落の特徴
～日本有数の列状集落と「ヤウラ」～
- 馬頭観音碑～圧倒する石像物～
- 地域に伝わる数多い民俗芸能

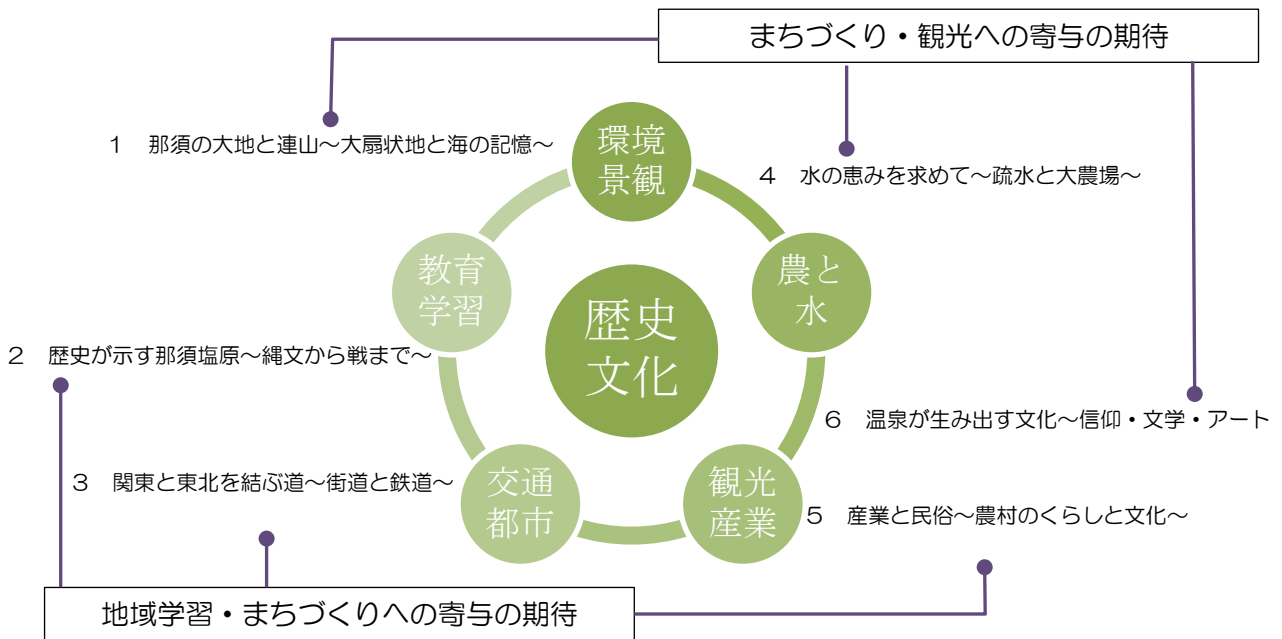
6 温泉が生み出す文化～信仰・文学・アート～

- 1200年の歴史を有する塩原温泉
- 板室温泉と三斗小屋温泉
- 山岳信仰～白湯山・黒滝山・嶽山～
- 温泉神社・湯泉神社
- 温泉と芸術～文豪と美術家～

6つの歴史ストーリーに関連して、指定文化財などを軸にサブストーリーを構成しました。

また、現在は指定していない文化財であっても、ストーリーに関連付けすることによって文化財の価値や魅力が一層見いだせるものとなり、さらに、保護・継承を図りつつ観光や地域活性化などのまちづくりに活かせるものと期待されます。

■歴史ストーリーの関連図



1 那須の大地と連山～大扇状地と海の記憶～

那須塩原市の変化に富んだ景観は、那須野が原に属する南東部と下野山地に属する北西部からなります。

那須野が原は、那珂川と箒川に挟まれ北西から南東に向って緩やかな傾斜を持つ台地で、面積は約40,300ヘクタール。日本の扇状地としては最大級のものとして知られています。

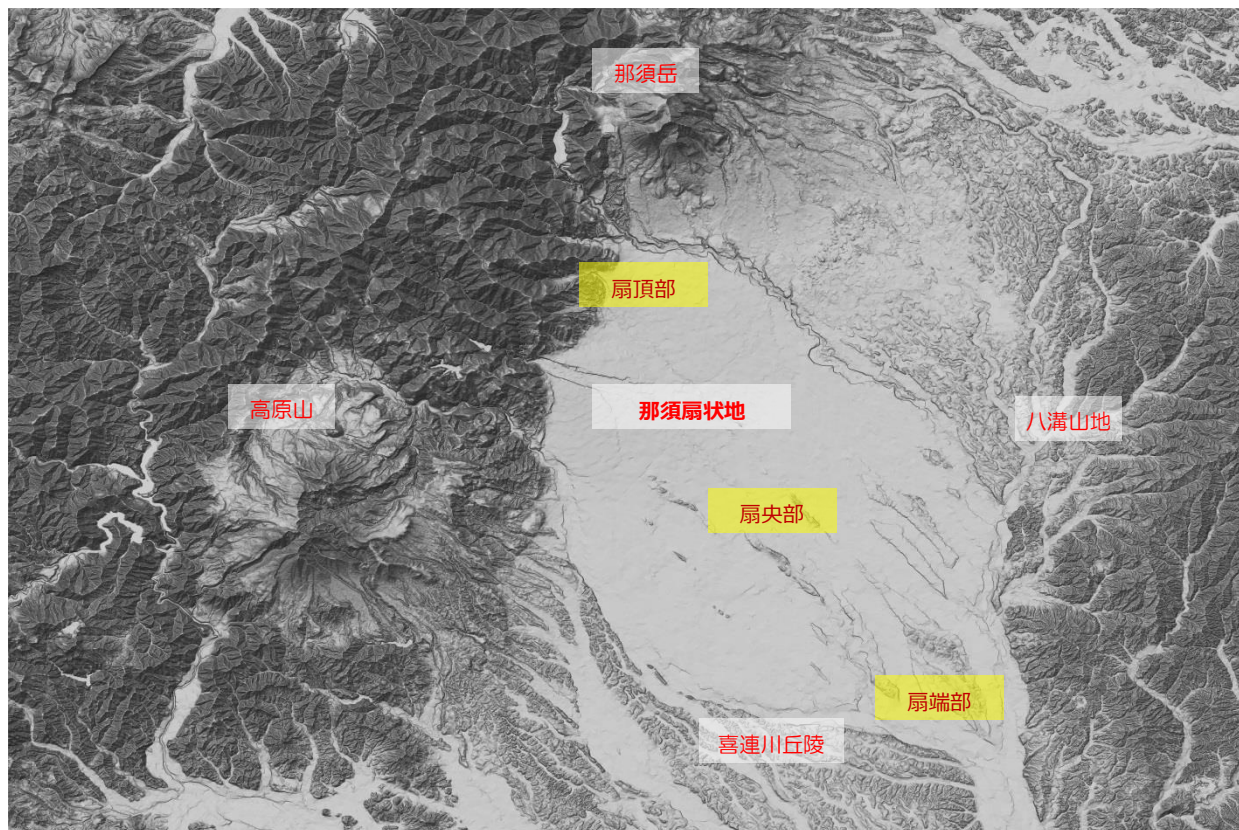
そのほぼ中央には蛇尾川と熊川が流れていますが、厚い砂礫層の上を流れるため地下浸透が激しく、扇中央部では水無川となってしまいます。蛇尾川、熊川を挟んで東西に那須東原（大輪地原）、那須西原（西ノ原）と呼ばれた原野が明治初頭まで広がっており、周辺村落の入会秣場として利用されていました。その面積は、那須東原、那須西原あわせて約11,000ヘクタールに及びます。ここが明治期の那須野が原開拓の舞台となります。

扇状地の扇中央部から扇端部にかけては古くから湧水が点在し、縄文時代からくらしが営まれ集落を形成し、江戸時代には、五街道のひとつである奥州街道(奥州道中)が通っていた鍋掛・越堀は宿場として栄えました。

一方、市域の半分を占める北西部は東日本火山帯に属し、日光国立公園那須甲子・塩原地域や大佐飛山自然環境保全地域などが連続しており、塩原渓谷や40か所を越える滝など豊かな自然と塩原、板室、三斗小屋といった豊富な温泉に恵まれています。

また、塩原動物群や塩原湖成層といった地質学上貴重な自然遺産の観察も可能です。

市内に見られる豊かな自然風土は、日本最大級の扇状地が形成してきた大地の歴史物語なのです。



※国土地理院公開基盤地図 5m・10mメッシュデータを加工して作成(標高は強調)

●日本有数の大扇状地

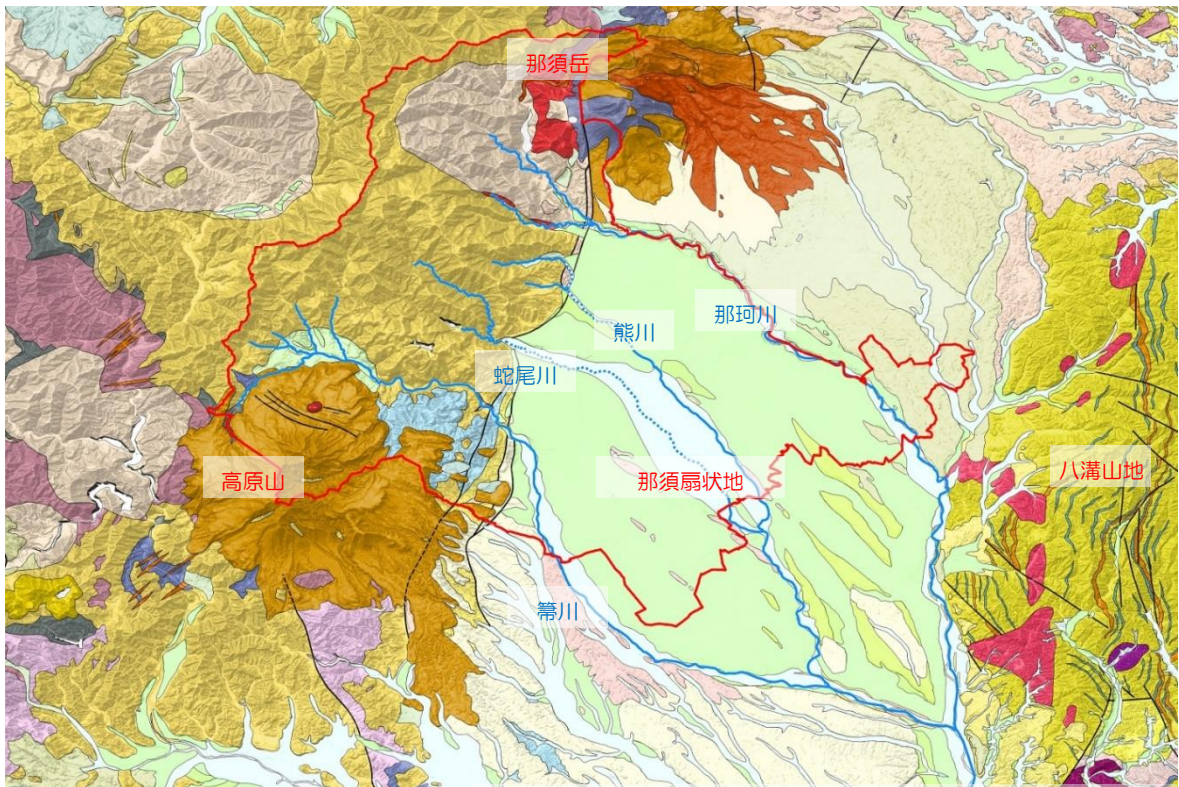
那珂川と箒川に挟まれた複合扇状地である那須扇状地の面積は 40,300ha。日本の扇状地としては最大級のもので、北西から南東に向かって緩やかな傾斜をもつ台地となっています。

扇状地のほぼ中央には蛇尾川^{きびがわ}と熊川が南東流していますが、厚い砂礫層の上を流れるため地下浸透が激しく、扇央部では伏流河川(水無川)となります。また、扇央部は地下水も深いため、古くから水利に乏しい地域でした。

扇央部付近から南東にかけては湧水点が見られ、周辺は縄文時代の遺跡が立地するのをはじめ、江戸時代より小規模な水田経営が営まれ集落が営まれてきました。また、藤荷田山^{ふじにたやま}など比高 30m 前後の数条の細長い分離丘陵列が、北西から南東方向に配列していて平坦に続く原の中ではランドマークとなっています。

那須扇状地北西部の穴沢から関谷を結ぶ線の西側には山地が連なり、平坦な扇状地地形との境界には関谷断層が走っており、総延長は 38km にも及びます。最新の活動は 14 世紀以後、17 世紀以前と推定されています。

■那須扇状地のようす



※産業総合研究所公開シームレス地質図第 2 版(2017.5)を基に加工



那須野が原公園展望塔から撮影した那須扇状地(右に見えるのは赤田池)

●蛇尾川～10km に及ぶ水無川～

蛇尾川は、高林地区の大佐飛山系からの豊かな表層水を集めて流下する箒川の2次河川です。延長距離は41.1kmあり、市内ひきぬま臺沼付近から扇状地に入り、扇状地中央部を南東方向に流下し、箒川と合流、さらに那珂川へと注ぎます。上流の小佐飛山(1,429m)周辺の山地には東京電力による堤高104mの発電専用ダム「蛇尾川ダム」が設けられ、一帯は豊かな集水域を保持しています。蛇尾川は扇状地中央部では厚い礫層が川床となっていて流れ込んだ水は地下に潜ってしまい、いわゆる水無川となっており、通常の河川とは異なる景観となっています。



蛇尾川の谷(臺沼付近より)



蛇尾川上流



蛇尾川中流

●扇中央部と扇端部の狭間の湧水

人々が定住するのに「水」が極めて重要であることは言うまでもありません。旧西那須野町では昭和62年(1987)から2カ年かけて「湧水地」の分布調査をしました。その結果、40カ所以上の湧水点を確認しました。こうした湧水点の確認は縄文時代の遺跡立地や江戸時代からの集落をはじめ、現在の地下水の動向なども検証できる重要な情報です。

また、扇中央部地下には伏流し蓄水した豊富な水量の地下水があり、戦後の揚水設備の技術革新により地下水を利用した水田化が可能となりました。

分野	名称
指定文化財	常盤ヶ丘・烏ヶ森の丘・赤田山・箭坪の大輪地ヶ原絵図・那須疏水旧蛇尾川伏越出口
未指定文化財	関谷断層・蛇尾川・津室川湧水地
その他文化資源	出釜

●豊富な化石～海の記憶とかつてあった塩原湖～

塩原湖成層は、約 30 万年前に高原山の活動で生じたとされる塩原カルデラ内にできた東西約 6 km、南北 3 km の三日月型の塩原化石湖(または古塩原湖)の湖底の堆積物の地層を指します。木の葉化石園内の塩原湖成層の露頭の高さは約 20m あり、その層理は 3 cm ないし 15cm のもの数千層よりなります。文化財としては未指定ですが、(一社)日本地質学会により日本の地質百選に選ばれており、更新世中期の高原火山の活動に伴い形成されたカルデラ湖を埋めた堆積物中に、植物・昆虫・魚類などの化石が多産することで有名です。これまでにおおよそ 170 種類の植物化石が発見されています。その主なものはブナ・イヌブナ・クリ・オノオレカンバ・ミズナラ・ミズメ・ヤシャブシ・ナツツバキ・カツラ・コミネカエデ・ハウチワカエデ・リョウブ・シナノキ・アズキナシ・オオカメノキなどで、現在の冷温帯に分布している樹種が大部分を占めています。また、その周辺に生息していたウグイ・カエル・トンボ・ハエ・ハチ・クモ・ネズミなどの動物化石が植物化石と一緒に発見されています。木の葉化石園では、岸边付近の湖成層の観察と、ここから産出した化石標本の展示や、周辺の学校児童・生徒の地質学習も行っています。

要害公園では湖心付近の湖成層の露頭(塩原層群宮島層)があり、ラミナ(地層に見られる縞模様的一种)や断層、しゅう曲などの堆積構造が観察できます。



木の葉化石園にて学習する
学校児童



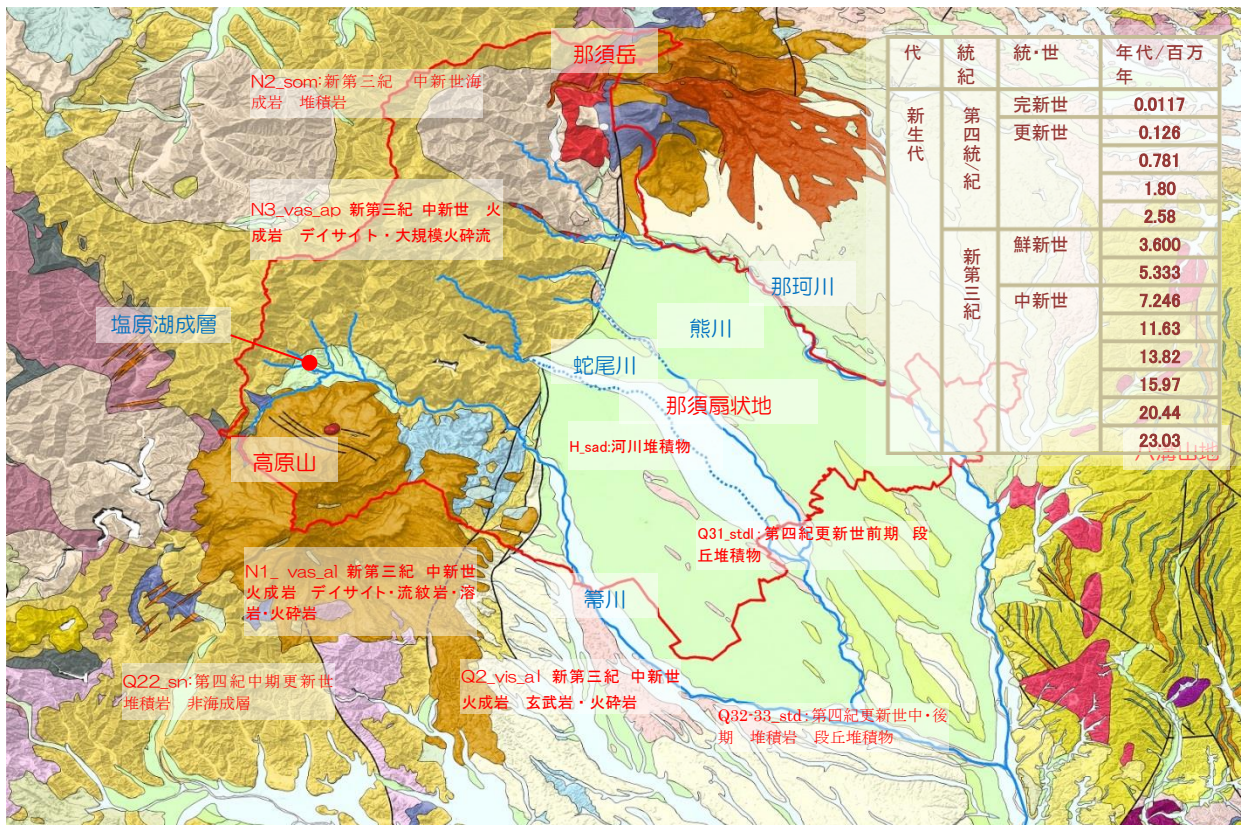
木の葉化石園の露頭



箒川要害公園付近



要害公園塩原湖成層露頭



※産業総合研究所公開シームレス地質図第 2 版(2017.5)を基に加工

●大黒岩化石層群～塩原動物群～

鹿股沢層(約1,400～900万年前)は、新生代新第三紀中新世中期～後期の海成層で、多くの海生生物化石を含んでいます。特に貝類化石を豊富に産し、カネハラヒオウギ(*Chlamys kaneharai*)やシオバラザルガイ(*Laevicardium shiobarensense*)など多くの種が新種として記載されているほか、これらの貝類化石群集は、沿岸域の冷温系動物群である塩原動物群の模式地となっています。

塩原動物群は、近年、鹿股沢層上部から暖流系動物群の特徴種につながる系統も報告されており、現在も調査が進められているところです。

大黒岩化石層群は、鹿股沢層の中部に位置し、潮間帯(水深0～30m程度)の堆積物と貝殻が海底谷に流れ込んできたもので、層厚は約10mあり、流れ込み型のため、ほとんどの二枚貝は離弁で殻は破壊されていますが、塩原動物群の典型的な種を産出することで大変貴重です。

市では指定文化財に指定し保全を図っていますが、自然崩壊など注意が必要とされ、県レッドデータでは「要観察」とされています。



大黒岩化石層文化財標柱



大黒岩化石群貝類化石産出露頭



大黒岩化石層地層と箒川

●連山を刻む溪谷と清流

塩原地区では、高原山北麓の山系・箒川・塩原溪谷・豊富な瀑布など、地域の温泉と相まって身体と目に訴える環境が四季折々を通じて訪れる多くの人に癒しを与えてくれます。区域の多くは国立公園の範囲に入っており、主に公園としての園地や遊歩道の整備が行われて、利用者の便を図っています。

夕の原から竜化の滝に向かう遊歩道の途中に岩面が材木を並べたように見える場所があります。通称「材木岩」と呼ばれるもので、日本の火山でよく見られる安山岩質の岩石(火成岩)の一種です。柱のように見えるのは、マグマが固まるときの温度や冷える速さにより、岩石をつくる鉱物同士が一定の規則性をもって固まった結果できたものです。

火成岩がこのように一定の方向に決まった形にひび割れることを「節理」といい、材木岩はその形状から「柱状節理」といわれるもので、みごとな形状を表わしています。

道路の下を流れる箒川にかかる「布滝」の左岸一帯に材木岩が露出する景観は、塩原の代表的な景勝地となっています。なお、近くにはほぼ水平方向にひび割れている「板状節理」も見ることができます。

また箒川の支川である甘湯沢・鹿股川・赤川には「回顧の滝」(55m)・「竜化の滝」(60m 3段)など変化に富む47か所の滝が知られています。



塩原布滝付近材木岩露頭



塩原布滝付近材木岩露頭



要害公園塩原湖成層露頭



竜化の滝

分野	名称
指定・記念物	塩原の材木岩・大黒岩化石層群
未指定文化財	塩原湖成層・木の葉化石園化石産出露頭・箒川要害公園露頭・回顧の滝・連珠の滝・竜化の滝・布滝・雄飛の滝・魚留の滝、ほか

●那須岳と高原山

市の北部の山間部は、那須岳と高原山に連なります。二つの火山は、歴史や生活の上でも深い関わりを持ってきました。

那須火山は、関東平野北端の関谷断層に沿って南北に配列する成層火山群で、活火山としての茶臼岳(標高1,915m)はその一峰です。那須火山群は、北から南にむかって、甲子旭岳火山(約50万年前)・三本槍火山(約30万年前)・朝日岳火山と南月山火山(約10~20万年前)と呼ばれ、それぞれ活動した時期の異なる成層火山となっています。また、那須火山群では過去に数回の山体崩壊が起きて、20万年前以前に黒礫岩層なだれ、約14~17万年前に那珂川岩層なだれ、約3~40,000年前に御富士山岩層なだれなどを発生させ、その堆積物は東側の山麓の広い範囲を覆っています。

那須火山群で最も新しい茶臼岳は、約1.6万年前から活動を開始し、溶岩・火砕物を大部分は東山麓に、一部は西側の那珂川上流部に堆積させています。

現在まで1万年間も茶臼岳の活動が続いており、約11,000年前~6,000年前までの5,000年間に、それぞれに降下火砕物・火砕流・厚い溶岩流を噴出する3回の大きな活動が知られています。約6,000年前以降は、数百年に1回程度の水蒸気爆発が発生していましたが、約2,600年前に比較的規模の大きな活動があり、山頂の火砕丘が形成され、その後も水蒸気爆発が繰り返され、1408年から1410年の活動によって、降下火砕物・火砕流が噴出し、さらに茶臼岳溶岩ドームが形成されました。この後、小規模な水蒸気爆発が繰り返されています。

高原山(釈迦ヶ岳・標高1,795m、富士山・標高1,184m)は、塩原地区から矢板市域に位置する成層火山で、北部のカルデラ火山(塩原火山)とその中央火口丘(明神岳、前黒山)、および南部の釈迦ヶ岳、西平岳、鶏頂山、剣が峰などからなる円錐火山(釈迦岳火山)からなっています。さらに、前黒山北側山麓には西北西-東南東の断裂帯(割目群)に伴う単成火山があります。活動は約50万年前に始まり、約10万年前にはおもな活動を終止させたと言われています。この後に長い休止期がありましたが、約6500年前には北側で割れ目噴火が発生し水蒸気爆発と降灰の活動があつて、割れ目火口の上に富士山溶岩ドームが形成されました。

高原山の火山活動に伴うものとして、黒曜石が産出されており、市内箒川沿川の縄文遺跡や槻沢遺跡などでは石材として使われた可能性があり、市内縄文文化・遺跡との関連性が指摘されています。

2 歴史が示す那須塩原～縄文から戦^{いくさ}まで～

那須塩原市には縄文中期の大規模集落である槻沢遺跡や井口遺跡をはじめとする数多くの遺跡が残り、土器の散布地も含めるとその数は70か所以上にのぼります。那須扇状地が生み出した湧水地近くには縄文時代の遺跡が存在しており、この地が豊かな自然の恵みを有していた証といえましょう。

時は流れ、鎌倉時代に源頼朝が行った大規模な巻狩は、那須野が原ならではの歴史絵巻です。巻狩の舞台は那須郡一帯に及び、およそ三週間にわたり繰り広げられたと伝えられています。

頼朝の次男で三代将軍となった源実朝はその時の光景を想像し、『金槐和歌集』に、

武士^{もののぶ}の矢並つくらふ籠手の上に 霰たばしる那須の篠原
の歌を残しています。

平安末期から室町時代にかけては、那須氏、宇都宮氏、長沼氏といった豪族の争いの場となりました。各所に残る城跡が当時の攻防の歴史を物語っています。

江戸時代に入ると、この地域は大田原藩領、黒羽藩領、幕府領、そして、塩原の地が宇都宮藩領と分かれました。戊辰戦争では塩原、関谷、塩野崎、板室、さらに三斗小屋において、旧幕府軍と新政府軍の間で激しい戦闘が行われました。

こうした歴史を物語る文化財が市内各所に残ります。

●槻沢遺跡と井口遺跡

槻沢遺跡・井口遺跡は、西那須野狩野地区に所在する栃木県を代表する縄文時代中期中頃から後期前半(5,000～4,000年前)の遺跡です。那須扇状地の扇中央部に位置し、槻沢遺跡は権現山丘陵の北端の洪積台地上、井口遺跡はその北西の緩斜面に立地し、国道4号を挟んで800mほどの距離で対峙しています。

昭和8・12年(1933・1937)に槻沢遺跡、昭和15年(1940)に発見された井口遺跡の発掘調査が、大山史前学研究所によって行われています。これらの調査は、栃木県内の縄文時代は勿論、古代を含めても集落遺跡の発掘調査の嚆矢として評価されています。大山史前学研究所は、大山巖元帥の二男大山柏が主宰し、大正12年(1923)に東京都にあった大山邸内に史前研究室として開設されました。9月の関東大震災により焼失し、大山家が別邸・大山農場のあった西那須野に疎開したことで、槻沢・井口で縄文土器が散布していることが大山柏の耳に入り、発掘調査が実施されたと考えられます。発掘調査は所員の池上啓介が担当し、発見された竪穴(袋状土坑)は人間の住居としては小さいことから、生活物資の貯蔵用の穴との解釈を示し、その後の袋状土坑研究の端緒となった調査として考古学的にも注目されています。

槻沢遺跡



槻沢遺跡発掘調査区全景(平成4年)

槻沢遺跡は、東西 300m、南北 500mに及ぶ大規模な遺跡です。昭和 52 年(1977)の発掘調査で環状に住居跡が分布することが予想され、この地域の拠点集落と考えられています。これまでの調査で 200 軒近い竪穴住居跡が発見されており、中期後半の住居跡には土器と石を組んだ二つの火所がある特徴的な複式炉(写真)が設けられています。複式炉は東北地方南半を中心に北陸地方の雪国に分布する炉ですが、槻沢遺跡のものは東北のものに比べコンパクトで土器を埋設しない石組の複式炉なども

あり、那須地方の独自性が見られます。

また、木の実などの食糧貯蔵用の袋状土坑などの穴も 900 基ほど発見されています。昭和 52 年(1977)の調査では、関東・東北南部の型式のほか、両者を折衷したものや北陸地方の影響を受けたものなど、31 個の縄文土器が一つの土坑から一緒に出土したことから、平成元年(1989)に国の重要文化財に指定されました。



槻沢遺跡土器埋設複式炉



槻沢遺跡石組複式炉



深鉢形土器

井口遺跡

井口遺跡は、平成元年(1989)の圃場整備に伴う確認調査で、東西 500m、南北 500mに及ぶ大遺跡であることが確認されました。遺物の分布状況などから、天満宮付近を中心にいくつかの小集落で構成されるとも考えられています。過去 3 回の発掘調査は部分的な調査ですが、槻沢遺跡とほぼ同じ時期の中期中頃から後期前半の集落跡で、複式炉をもつ竪穴住居跡や袋状土坑のほか、県内では希少な敷石住居跡などが出土しています。

槻沢・井口両遺跡とも、遺跡すべてを発掘したわけではなく、まだ地中に多くは残っています。集落の全容はわかりませんが、同じ時期の大規模な集落遺跡が近接して存在し、周辺にも小規模な西遅沢遺跡、西富山遺跡、槻沢西遺跡などがあります。このような例は、栃木県内はもちろん、全国的に希少なものとして注目されます。

その他の遺跡

市内各地区には、山岳地と水の乏しい那須扇状地の扇頂部から扇中央部には、遺跡は少ないと考えられていました。実際、昭和 47・48 年(1972・1973)に行った栃木県教育委員会の遺跡所在調査では、48 遺跡(黒磯市 20、西那須野町 4、塩原町 24)でしたが、西那須野町(昭和 63～平成元年)や那須塩原市(平成 26～28 年)の詳細分布調査によって、縄文時代を主に旧石器から中世まで 92 か所の遺跡が確認されています。

発掘調査された槻沢遺跡と井口遺跡遺物の以外は、土器や石器などの破片の散布のみですが、発掘調査が行われれば、重要な発見がある可能性は非常に高いといえます。

分野	名称
指定文化財	深鉢型土器《残欠共》・槻沢遺跡・槻沢遺跡出土の縄文土器
未指定文化財	槻沢遺跡出土品(指定品以外)・井口遺跡出土資料
周知の縄文遺跡	笹風遺跡・長久保遺跡・赤坂遺跡・平場遺跡・大又カリ遺跡・東山遺跡・上荒屋上遺跡・寺子遺跡・上荒屋下遺跡・山城遺跡・蛇沢遺跡・上の台遺跡・古下遺跡・上の沢遺跡(縄文)熊久保遺跡・杉渡土遺跡・間ノ沢西遺跡・七間々遺跡・中山遺跡・堂本遺跡・松ノ木平遺跡・小丸山遺跡・那須東原遺跡・川前遺跡・回顧橋遺跡・鹿野崎遺跡・上黒遺跡・野沢遺跡(金沢神社裏遺跡)・塚原遺跡・下山遺跡ほか

●源頼朝による盛大な那須野巻狩

鎌倉時代の初期、建久4年(1193)に源頼朝により那須野の巻狩が3000人規模で22日間にわたっておこなわれました。獲物は鹿・熊・狐などであったようです。『吾妻鏡』建久4年(1193)4月23日の条に「那須野等御狩、漸事終之間」とあり、狩野の地名が残るあたりで行われたと推察されています。

実朝(1192～1219)は、後にこの狩を想像して、

「武士の矢並つくらふ籠手の上に 霰たばしる那須の篠原」『金槐和歌集』とうたっています。

●郡界の攻防～中世の城館～

市内には、現在7つの城館跡が確認されています。塩原地区3(塩原(要害)城跡・狭間城跡・離室城跡)、箒根地区3(田野城跡・野沢(真木)城跡・鳩ヶ森城跡)、鍋掛地区1(杉渡戸要害跡)となっています。城館跡は、自然の立地を活かした丘陵地や溪谷地にあり、軍事的施設として山城や居館等の形態で、平安時代末期から室町時代にかけて築造されたものと考えられています。

中世の塩原・箒根地区は、主に塩谷氏や宇都宮氏の家臣、また、一部は長沼(小山)一族等に支配されていました。それぞれの城館は、宇都宮氏・会津長沼氏・那須氏間の抗争の地でもあったと考えられています。これらの城(館)跡は、現在地元郷土史研究会会員の調査が進められていますが、中世の城(館)跡の確実な構築年代を示す資料は極めて乏しく、伝承によるものも少なくありません。

分野	名称
指定文化財	塩原(要害)城跡・鳩ヶ森城跡・野沢(真木)城跡・離室城跡・狭間城跡
未指定文化財	田野城跡・杉渡戸要害跡
その他文化資源	那須野巻狩り・上郷屋・南郷屋・東小屋・沓掛

●各藩・幕府領が入り乱れた江戸期の支配者

本市域は、江戸期には、那須藩領、幕府領、黒羽藩領、大田原藩領などに分かれていました。また、塩原地区は主として宇都宮藩領となっていました。さらに、広大な原野であった那須東原(大輪地原)は、周辺44か村の入会地(馬の飼料や屋根にふくカヤ・畑の肥料などとなる草を刈り取る共同利用の土地)、那須西原(西ノ原)は周辺64か村の入会地となっていました。

■江戸時代末期的那須塩原市域の村々

領地区分	村名
幕府領(28か村)	黒磯、上厚崎、下厚崎、鍋掛、長久保、木曾畑中、沼野田和、三本木、長島新田、上大塚新田、下大塚新田、山中新田、東小屋、大原間、西沓掛、東沓掛、前弥六、北弥六、唐杉、木綿畑、湯宮、鳴内、百村、油井、細竹、岩崎、亀山、高柳
大田原藩領(44か村)	烏野目、小結、赤淵、矢坪、高林、赤坂、箕輪、洞島、上郷屋、中内、無栗屋、鹿野崎、塩野崎、波立、和田、方京、島、上中野、下中野、笹沼、石林、南郷屋、富士、槻沢、東関根、関根、東遅沢、西遅沢、中野内、上井口、下井口、下大貫、上大貫、高阿津、宇津野、金沢、下田野、関谷、遅野沢、接骨木、横林、上横林、折戸、壘沼
黒羽藩領(6か村)	越堀、杉渡戸、寺子、樋沢、野間、板室(三斗小屋を含む)
宇都宮藩領(4か村)	上塩原、中塩原、下塩原、湯本塩原、 ※上記4か村は、慶応2年(1866)から明治2年まで「高德藩領」となる。

※『旧高旧領取調帳』を基に作成

●那須塩原地区と戊辰戦争

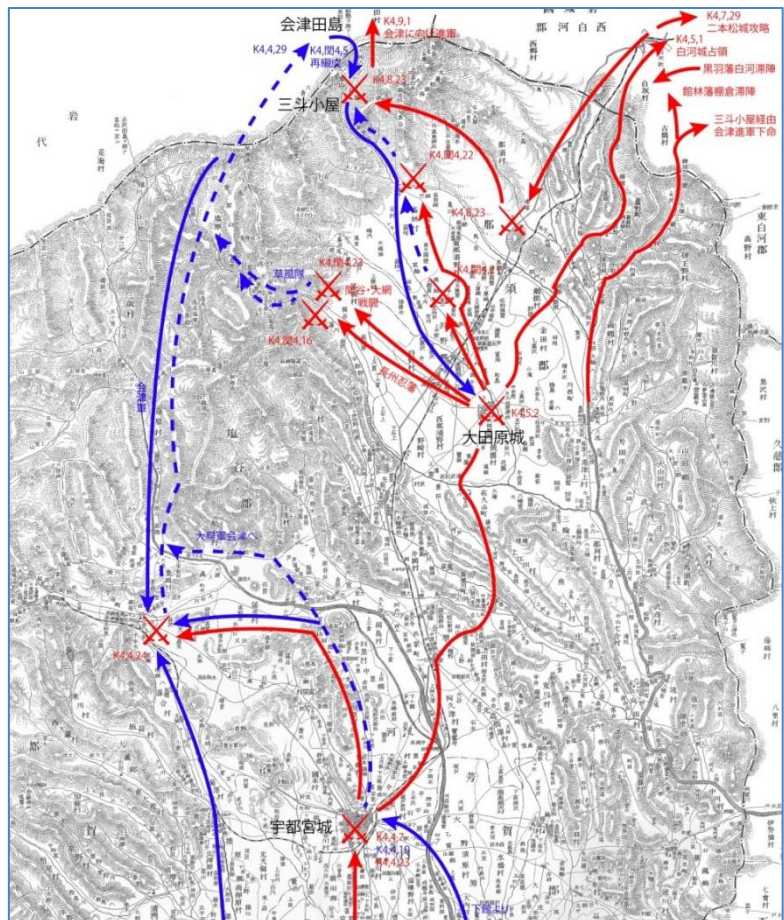
日本の近代化のために日本人同士が戦った戊辰戦争では、塩原地区・板室・三斗小屋付近において新政府軍と旧幕府軍との間で激しい戦闘が行われました。

慶応4年(1868)閏4月には大網(4/16)、塩野崎(4/21)、板室(4/22)、関谷(4/23)で新政府軍と旧幕府軍の戦いがありました。中でも、板室での戦いは5時間にも及び、戦死者17人(資料によっては30~60人)に上りました。またこの戦いでは、穴沢、油井、阿久戸、板室の集落で計64戸が新政府軍の放火によって焼失しました。

また、8月23日には三斗小屋宿において激しい戦いがあり、戦死者16人、負傷者10人を数えました。

塩原では、旧幕府軍と新政府軍との攻防が繰り返されていましたが、劣勢になった旧幕府軍は会津への撤退に先立ち、8月20日と23日の二日に分け塩原全村を焼き払いました。焼かれずに残ったのは妙雲寺と塩原八幡宮などの寺社のみだったと伝えられています。

■戊辰戦争進軍図



※栃木県史編さん委員会『栃木県史』通史編5 近世二(昭和59年)を参考に作成

分野	名称
指定文化財	板室古戦場・三斗小屋宿跡・妙雲寺(本堂)・塩原八幡宮(本堂)
未指定文化財	阿久戸の供養碑・戊辰戦争死若干墓
その他文化資源	三斗小屋誌

●特攻隊基地にもなった陸軍那須野飛行場

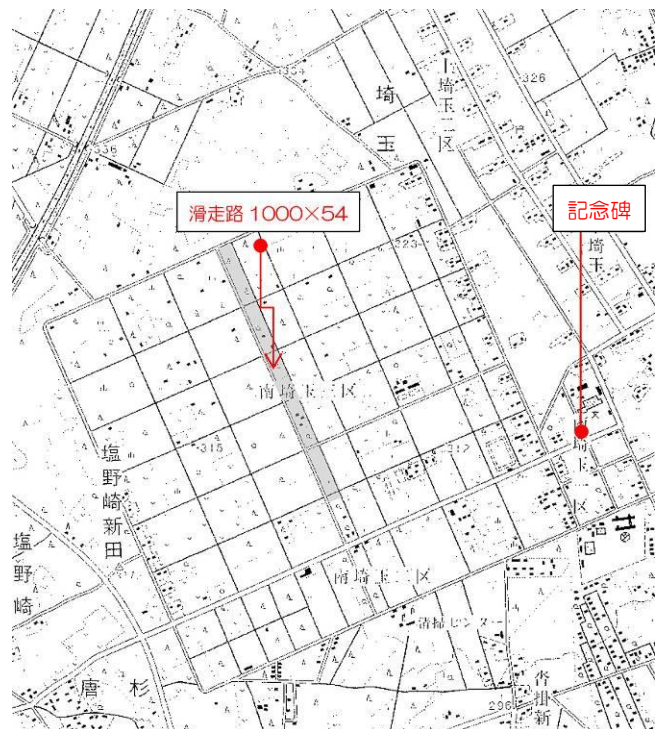
太平洋戦争(1941-1945)中の昭和17年(1942)、黒磯地区埼玉に熊谷飛行学校の那須分教所として敷地総面積約280haにも及ぶ飛行場が開設されました。藤田農場及び青木農場、さらに、隣接の集落から土地を収用して、3カ年にわたる工事を経て開設されましたが、戦局の推移と共に組織は再編され、本土空襲が激しくなった昭和20年(1945)には、爆撃で機能不全となった茨城銚田陸軍学校の基地として、特攻機の基地にもなりました。7月12日及び8月上旬には米軍による激しい空襲を受け、場内の死亡者が17名を数えるに至りました。

敗戦後、軍事施設は進駐軍により焼き払われましたが、昭和22年からは外地からの引揚者のため那須農場帰農組合などが設立され、開拓地へと生まれ変わりました。

飛行場跡地に格納庫の遺構(コンクリート基礎)が残っていましたが、平成30年(2018)1月開発のため撤去されました。撤去前、教育委員会では所有者の同意を得て遺構の調査を行い、記録を残しました。



格納庫跡(平成30年消失)



分野	名称
未指定文化財	記念碑(2基)